

# ふっさ こどもの たんきゅうてん

## 「ふっさ こどもの たんきゅうてん」開催にあたって

この度は「ふっさ こどもの たんきゅうてん」を、このように開催できることを大変喜ばしく感じています。福生市では、「子育てするなら ふっさ」そして「こどもまんなか ふっさ」のスローガンのもと、市民、行政、関係機関など、市全体が一丸となって子ども政策に取り組んできました。中でも、保育園・幼稚園の施策については、子ども政策の根幹となるため、特に手厚く推進して参りました。平成28年、「保育園落ちた日本死ね!」という保護者の投稿がきっかけとなり、待機児童問題が社会問題となりましたが、福生市においてはコンパクトシティの強みを生かし、行政と保育園・幼稚園が強固に連携して、これまでに待機児童ゼロを9年連続で達成することができています。その後、各自治体の待機児童対策が実り、待機児童問題が解消する自治体が増えていますが、福生市においては、保育の「量」の施策から一步先を進み、保育の「質」の向上にも注力してきました。その施策の中でも大変重要となる取組が、この度実施した「とうきょう すくわくプログラム」です。このプログラムは、東京都と東京大学の研究機関であるCEDEP（セデップ）が連携し、乳幼児の「非認知能力」に着目した保育プログラムを構築する新しい試みです。私自身もプログラムの一部に参加させていただきましたが、子どもたちの未来に無限の可能性を感じることができ、その効果について強く期待しているところです。この展示をご覧いただき、保育園や幼稚園が、保護者のためではなく、子どもたちのためにこそあるということを改めて感じていただきながら、近い将来、健やかに成長して羽ばたいていく子どもたちの姿に思いを馳せていただければ幸いです。

令和6年3月18日 福生市長 加藤育男



聖愛幼稚園の振り返りにて



## 福生市×東京都「とうきょう すくわくプログラム」×東京大学CEDEP

2023年度、0歳から6歳の子どもの探究を支援する「東京プロジェクト」が始まりました。初年度は、江東区、渋谷区、福生市、港区（五十音順）の4自治体14の幼児教育・保育施設が参加し、東京大学CEDEPから子どもの探究の専門家（アートの専門家・教育の専門家）を派遣して、パイロット事業が行われました。福生市からは、すみれ保育園、聖愛幼稚園の2つの園がコア園として、ありんこ保育園、杉ノ子保育園、若葉保育園の3つの園がサブ園として参加しました。コア園では子どもの探究の専門家が先生方と一緒に探究の活動を行い、サブ園では先生方が子どもの探究の専門家と相談しながら探究の活動を進めました。

この展示会は、その取り組みについて知って頂くためのものです。それぞれの園の取り組みの中で、子どもたちは多様で豊かな発見を行い、それを表現しました。それぞれの子どもたちの姿と表現を味わって頂ければと思います。また、保育・幼児教育に携わる方々には、先生や専門家の問いかけや環境構成から、子どもたちとの探究をデザインするヒントを見出して頂ければと思います。

すべての子どもの学ぶ権利の保障に寄与することを願って。

東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター（CEDEP）

### CEDEP福生チーム

福生チーム	東京大学CEDEP
子どもの探究の専門家：山岸日登美・伊久美幸子	秋田喜代美・浅井幸子・遠藤利彦・清重めい・野澤祥子
幼児教育の専門家：小玉亮子	
学生スタッフ：藤谷未央・松尾杏奈・森永純子	

## 探究テーマ「ひかり」について ーすみれ保育園ー

夏の水遊びの時、水面に映るキラキラに気づいて、そっと手を伸ばして触れ「このひかりはどこからきているの？」というしぐさで光の方向を見上げます。そして、水面と比べるような姿がありました。

テラスの日除に映るハートの葉っぱを「ねえみて！」と伝えるかのように指差します。

水の上にできた一瞬のひかりのラインに触れようと手を伸ばしました。

『子どもたちはひかりに気づいている』

0歳の先生たちの気づきからここに綴られている「ひかりの探究」は始まりました。

0歳の子どもたちは身体全身を使い話します。言葉で話すのではなく、目で、手で、声で、姿で話しています。嬉しい、悲しい、驚きなどの喜怒哀楽はもちろんですが、ささやくような繊細な言葉も、微笑むような暖かい言葉も豊かに持っています。それらの言葉に耳を澄まし、耳を傾けて聴き入ることからはじめ、それはずっと大切に続きます。知覚と言語を分けずに全て子どもたちの言葉として聴き入る眼差しを中心に置くということです。

ひかりは世界を照らし様々なことを明らかにしていく一方で、かげを生むという側面も持っています。ひかりとかげは、私たちの生活や人生にとって重要な意味を成しています。ひかりは、子どもたちが大好きな「あるものがない」、つまり「いないいないばあ」の要素も含まれていたり、物や事象をより鮮明に見せる効果があります。

子どもたち一人ひとりはどうのようにひかりと仲良くなっていくのでしょうか。子どもとひかりとの関係性を、子どもたちの言葉から丁寧に見つめていくことがこの探究活動の一つの軸となりました。

また、そのためには、子どもたちが知的好奇心を持ちひかりと仲良くなっていくことを予測した環境を構成することがとても重要です。ひかりの持つ美しさと繊細さを損なうことなく、子どもたちを受け入れる環境を構成するには、先生方との対話とコラボレーションが必要でした。

すみれ保育園の探究活動の一步目に詰まっている、子どもたちの素晴らしさと探究活動のプロセスを皆さんと共有できると幸いです。



## 探究テーマ「オリーブ」について ー聖愛幼稚園ー

3歳児クラス「にじ」 4歳児クラス「オリーブ」 5歳児クラス「ひかり」

聖愛幼稚園のクラス名には、子どもたちへの願いが込められています。ひかりがなければ私たち生き物は生きていくことができません。にじはひかりと水との関係性の中で生まれます。オリーブはひかりや水があるしるしであり「生命」の象徴となります。旧約聖書「ノアの箱舟」の物語では、鳩がオリーブの枝を運んできたことで、洪水が退き、新たな平和な世界の始まりを知らせたとあります。「和解」「平和」の意味もオリーブには込められているそうです。

聖愛幼稚園の園庭には美しいオリーブの木があり、行き来する子どもたちを見守っています。探究活動について対話したある秋の日、オリーブの木にはみどりや紫の実もたわわに実っていました。園長先生や4歳児クラスの先生方と子どもたちの興味や遊びについて対話している際、子どもたちはクラス名「オリーブ」の意味を知らないのでは？という先生方の声から、探究のテーマを「オリーブ」にすることが決まりました。

クラスに込められた想いを秘めて、子どもたちとの「オリーブ」の探究が始まりました。子どもたちはどのように「オリーブ」を知り、仲良くなり、概念化していくのでしょうか。私たち大人は、子どもたちの声や姿に耳を傾け、見つめ、子どもと共に思考していけるのでしょうか。子どもも大人も、一人ひとりがよく見て、感じて、考えるプロセスを大切に歩み始めました。

「オリーブの探究」のはじめの一步、そして子どもたちの素晴らしい考えを多くの皆様と分かち合うことができると幸いです。

